

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 52

2017.6.30発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第52回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ 『日本武尊を追いかける～白鳥伝説』

平成29年6月4日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『日本武尊を追いかける～白鳥伝説』と題し、八木敦氏（日本武尊研究家）に講演していただきました。全国の日本武尊伝説・伝承の地を隈無く歩き蒐集された資料を基にして、春日井市内に伝わる伝承、伝説の位置づけをわかりやすく解説されました。春日井市も「日本武尊」縁^{ゆかり}の地であることが改めて解りました。フォーラム参加者は、19名でした。



会場風景

講演：八木 敦 氏



－発表要旨－

『春日井のむかし話(上)』(平成 25.9、春日井市刊)の最初に「ヤマトタケルと地名」が載せられている。内津、西尾、明知、神屋の町名はその伝説と結びついた地名であると説明している。今回、八木敦氏(坂下小学校)に長年研究されてきたヤマトタケル伝説について「日本武尊を追いかける～白鳥伝説」と題して講演していただいた。今から二千年も前の景行(けいこう)天皇(記紀では 12 代)が全国支配の成立期の王として描かれるが、その第二皇子の倭建(ヤマトタケル)が熊襲・蝦夷の征討をしたと伝えている。征西と東征の功績である。その帰り道、タケイナダネが海から尾張に向かう途中、水鳥をとろうとして海に落ち、死んだと美濃から尾張に入るところでその死を伝えられた。「うつつかな」と嘆き悲しんだところが内津とその後呼ばれ、西尾(さいお)などいくつかの地名が伝説と関係して残る。

I. 小学校 6 年生の社会科では神話の中の話として記述されている

八木氏は授業で語る場所は必ず事前に現地で確認し、現地の人から話を聞くという。それがこうじて、全国のヤマトタケル伝承地を周ることになった。『古事記』にも記載されるが、『日本書紀』をもとにされた研究になっている。また、日本武尊は一説に大和朝廷において日本平定に努力した数人の勇者たちの偉業を統合し、それを一人の人物とした架空の英雄という説もあるが、「何人もの英雄の総称」という考えに共感し、「本当に伝説上の人物か」に疑問を呈し、実在の人物であったとの立場をとる。双子兄の大碓皇子(おおすのみこ)は歴史に登場しない人物で 42 歳で亡くなっているが、大和→岐阜県美山→土岐市鶴里→豊田市猿投神社に痕跡を残す。弟の小碓尊(おうすのみこと、諱)は日本武尊となり英雄として名を残した。

II. 景行天皇はわずか 16 歳の小碓尊(おうすのみこと)に熊襲を討たせた(征西)

熊本・鹿児島に景行天皇が征西した伝承地が多い。熊襲がまた騒いだということで天皇は小碓尊に熊襲を討つように命じた。熊襲は球磨俗と曾於俗の総称で、熊襲の勇者は取石鹿文(とろしかや、またの名を川上梟師=かわかみたける)で、宴会の場で童女の姿でもぐりこみ、川上梟師を刺し殺した。この時、「これよりあなたは大和武皇子と名乗ってください」と言われ、以後、小碓尊はヤマトタケルと改名した。征西の地は、田川市の土蜘蛛との戦い、宮崎県延岡市や鹿児島県霧島市で熊襲との戦いが伝承されている。田川市には白鳥神社が 2 社ある。熊襲との戦いの伝承地の 1 つ延岡市には熊襲を刺し殺した短剣の柄を埋蔵した本庄稻荷神社(剣柄稻荷神社)が国富町にある。伝承地の 2 つめは霧島市隼人町嘉例川に熊襲が住んでいた穴がある。景行天皇が 6 年間滞在した高屋宮に日本武尊も滞在した。その候補地が宮崎県西都市の黒貫寺、高屋神社で、高屋神社は宮崎市にもある。鹿児島県の候補地は肝属郡肝付町の高屋神社である。征西ゆかりの地は九州を一周する。

III. 征西の帰路、「古事記」では倭建命は出雲に行き、出雲建を討った

「日本書紀」では北九州北部を通過し、吉備から難波へ行った。出雲こそ征西の大きな意味

があるところだが、簡単に済まされ、次の東征の話に移られた。(出雲は鉄生産の拠点の地)

IV. 東征へ

征西の命を受けた13年後、西暦110年に日本武尊一行は都を出発し、倭姫命に挨拶するために、伊勢神宮に寄り道した。この時、天叢雲劍(草薙劍)を授かる。元伊勢神宮は桑名野代官にあった。その候補地は、桑名市多度町の野志里神社。候補地は他にもある。伊勢国から海路で尾張へ行き、ここで全軍が集合した。東征軍は倭から吉備武彦、大伴八腹、土師氏、七拳脛が、尾張で合流したのは建稻種命、建蘇素命、忍山宿禰、日長氏であった。陸路で吉備武彦らは駿河を目指した。海路では、知多・渥美半島をまわり、駿河に向かった。出帆地は鳴海町の成美神社、東浦町の入海神社他からであった。社伝に残っている。

(1)愛知県内の陸路で名を残す地 … 大府熱田神社(休憩)、知立神社(祈願)、安城八幡社(休憩)、長瀬八幡社(矢作り)、矢作神社(矢作り)、菅生神社、甲山(お告げ)、岡崎白鳥神社(宿泊)、京ヶ峰、三村神社(妃が出産)、本宿神明社(祈願)、日本武尊社、法蔵寺、岡崎熱田社。矢を作る材料の調達で三河の山間部へ。白髭神社(岡崎市千万町)を通過し、新城市作手の白鳥神社などで矢じり(タタラで鏃)を作った。湯谷温泉での戦いでは湯屋梟師を討った。浜名湖岸では、都築神社(旧熱田神社)を通過し、湖西市吉美の熱田神社、御手洗、神井戸、白鳥の森で体制を整えた。

金山天神社での雄踏(足を踏みならす)、浜松市鹿谷町に立ち寄り、磐田市白羽の白羽神社から出帆といわれる。

(2)駿河へ、船団の到着地は焼津～そこで「野火の難」 … 大井川を上って川根町千頭に敬満大井神社創建した。駿河で土地の者から鹿狩りに誘われ、野の中に入っていくと、その者から野に火を放たれた。これを火打石と剣で難を逃れた。焼津の地名伝承である。野火の難の故地として、焼津神社(入江大明神)、草薙神社・首塚稻荷、久佐奈岐神社・矢倉神社(布陣した所、吉備武彦の子意加部彦が祭神)。

(3)三浦半島へ、走水(馳水)から対岸の上総に進行で海神の怒り … 焼津、厚木、鎌倉、逗子、葉山を通り、速水の地に到着して、日本武尊は「こんな小さい海なら飛び上がって渡れる」といったことに海神の怒りをかい、嵐が起きて命の危機にさらされた時、弟橘姫と侍女が身を投じて、暴風が止み、船は対岸に着くことができた。房総半島に上陸し、弟橘姫を偲ぶ毎日が続いた。「君去らず袖しが裏に立つ波のその面影をみるぞ悲しき」の歌の「君去らず」が木更津の地名になった。櫛や御衣、遺骨が流れ着いたと伝わる神社が8社あり、弟橘姫の墓と伝わる古墳(川崎市)もある。房総半島は激戦の地であった。最強の敵は阿久留(あくる)王であった。千葉県茂原市本納の橘樹神社の古墳には弟橘姫の櫛を埋めて墓としたと伝わり、断ち切れぬ想いが伝わる。この最大の戦いの跡大きな戦いはなかった。すぐに、上総から陸奥国に入る。尊は大きな鏡を掛けた船で蝦夷の境に到着した。出航地は千葉県旭市飯岡の玉崎神社であった。九十九里浜東岸を船出し、茨城県行方市蔵川の入口の三船神社に上陸し進軍。雷神社、大生神社、白鳥の里、角折を寄港し、那賀川を上った。水戸市青柳町の東征神社で船を埋め、水戸市宮内町の吉田神社で休息した。上陸したのは、竹木門(た

かのみなど)であった。「たか」は多賀、多珂の地を示す。その候補地は、相馬市原町の多珂神社か仙台市太白区富沢の多賀神社、多賀城市高崎の多賀神社があるが、最有力値は七ヶ浜・御殿崎である。さらに、石巻市桃生町太田の日高見神社、釜石市の尾崎神社奥の院に進軍。ここが、東征の最北端になる。東征の帰路、武蔵国から甲斐国へ、そして信濃国へ … 越国へ回った吉備武彦と美濃で再会した。土岐市の熊野神社に着く。尾張国との境である。この後、内々峠・内々神社奥宮で建稲種の訃報を聞く。この後の話は略する。

(記録：塚田 忠雄)

OPINION

『伝説・伝承』と『ふるさと意識』

—小野道風生誕伝説と日本武尊伝説の意味するもの—

『会報9号』「小野道風—歴史の記憶と伝承」の「書のまち春日井」の源流の中で、『地域（「松河戸誌研究会」）の人達の地道な「記憶」と「伝承」を語り継ぐ活動は、幾世代にも渡って続けられてきました。そして、小野道風は、地域の「誇り」と「Identity」を生み出しています。894年に生誕した小野道風について、1200有余年の時間軸は、「記憶」と「伝承」を紡ぎながら私たちに歴史資産、文化遺産を継承してきました。「松河戸誌研究会」は、先祖代々地域に伝えられてきた「記憶」と「伝承」を地道に真摯に引き継がれ資料の蒐集、遺跡の保存、研究会を先祖代々引き継いでいる研究会であります。今日の、道風記念館、遺跡保存会の存在の基礎は「松河戸誌研究会」に負うところが大であると言っても過言ではありません。「松河戸誌研究会」で蓄積されてきた社会的記憶、伝承（口承伝統、文書、イメージ、史跡保存、文化的行事等々）の記録の中から、道風に関する個別の歴史研究や書道文化活動の成果は生まれ、今日あると言うことができます。歴史研究は、地域の人々にしか感じ得ない発想や閃を第一義に考えて行くことが重要であり、地域の人達の「記憶」「伝承」の記録の営みは、小野道風研究にとって最も重視されなければならないことであると考えます。』と述べました。その意味においても、「日本武尊」伝説・伝承の研究も然りであると思っています。歴史を語るということは、過去から伝えられてきた「記憶」「伝承」をその時々の社会情勢、価値観、歴史意識、文化受容度等々によって記録され、叙述されて未来へ伝えられてゆくという行為のことです。

「記憶」の伝えられ方は、歴史的に、技術（口承～IT情報技術まで）、方法において大きく変化して来ています。そして、社会環境、価値観の変化によって、時には、滑稽に、時には教訓的に、時には政略的に様々な伝承のされ方をしてきました。しかし、どのような伝承のされ方をして来たとしても共通して言えることは、その時代の事実を何千年もの間「記憶」の伝承として、伝え続けられてきたと言う事実を踏まえて考えていく必要があります。

言葉に強烈な説得力を感じました。

(文責：河地 清)

次回

「ふるさと春日井学」研究フォーラムのご案内

「ふるさと春日井」の魅力を再発見する F O R U M

「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」

「地域活性化・まちづくりの応援メッセージ」

Forum for Furusato Kasugai Studies

第54回 Forum テーマ：

『地域歴史文化遺産の保存活用と地域活性化』

日 時：平成 29 年 10 月 8 日 (日) 午後 1 時 3 0 分～3 時 3 0 分

場 所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）八幡小学校西側

TEL：0568-56-1943（〒486-0837 春日井市春見町 3 番地）

講 師：新山 悦次 氏

略歴：一級建築士・測量士

NPO あいちヘリテージ協議会 顧問

あいちヘリテージマネージャー（登録番号 1214）

フォーラム内容：地域に眠る歴史的な文化遺産を発見、保存、活用し、地域づくりに活かすことは、今日の新しい発想による地域活性化の考え方です。

本会「ふるさと春日井学」研究フォーラムの基本的考え方です。50数回にわたりその趣旨で多くの証言、知見を得てきました。今後の春日井の地域創生の鍵を握るのは、市内にある、歴史遺産(heritage)を財産(property)としてそれをどのように活用しながら地域の活性化を図ってゆくかが求められています。県内の歴史文化遺産を活用しながら地域づくりがどのように行われているか……そして、春日井では今後どの

ように……等々を発表していただきます。……後は FORUM で

(非会員の方のみ資料代 500 円徴収させていただきます。)

※事務局：〒486-0825 春日井市中央通り 2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索

